

かながわの教育ビジョンに関する提言

地域・家庭・学校

つむぐ おりなす

かながわの人づくり

- 育てる思いを重ね合う
 - 持ち味や役割が響き合う
 - 学び合う、学び続ける

かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会

平成18年8月26日

目 次

	(頁)
提言にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1 提言がめざす方向・・・・・・・・・・・・・・・・	2
2 提言の全体構成・・・・・・・・・・・・・・・・	3
3 提言〔3つの柱・8つの視点・24の提言〕	4
あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	24
【Column(コラム)】	
「チャレンジショップの教育効果！」	8
「居場所って？ ～『いる ある』から『なる』へ」	13
「飛行機の仕事を知ろう！」	15
「小学校1年生のスムーズなスタートに向けて！」	19
【資料】	
(1) 教育ビジョンに関する県民論議の経過	26
(2) 「かながわ人づくりフォーラム・ワークショップ」で の主な意見一覧	28
(3) 用語解説	33
(4) かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会の設置 及び運営に関する要綱	37
(5) かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会名簿	38

提言にあたって

かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会は、平成17年11月5日の「第1回かながわ人づくりフォーラム」で、神奈川県教育委員会がアピールした「かながわ人づくり宣言」を受けて、これからのかながわの教育に関する総合的な指針となるビジョンづくりに向けて、県民の皆さまとの教育論議を進めてまいりました。

実際の教育論議は、フォーラムで提起された課題に基づき、「少子化時代に対応した家庭教育を支える子育て環境づくり」、「学ぶ楽しさやわかる喜びが実感できる学校づくり」、そして「生涯を通じた自分づくりを応援する環境づくり」という3つのワークショップの場を設定し、継続的に展開してまいりました。また、体験を通じて得られたものを教育論議に活かすため、演劇体験、海での自然体験、親子体操といった教育イベントも併せて開催し、延べ約1,700名にのぼる県民の皆さまに参加いただくことができました。この間、インターネットを活用した「電子会議室」も開設し、広く県民の皆さまからの御意見を聴取する機会も工夫させていただきました。

この度の「かながわの教育ビジョンに関する提言」は、このような県民の皆さまとの論議の成果を受け、運営推進委員会として協議した内容を整理したものです。神奈川県教育委員会では、これから教育ビジョンの策定を進めていくことになると思いますが、本提言を、県民の皆さまが期待するかながわの教育のあり方として受け止め、その反映に努めていただければ幸いです。

今後策定される、新たな教育ビジョンに基づいて、あらゆる県民の皆さまが、次代を担う子どもたちの教育や、生涯にわたる自分づくりにかかわり、一人ひとりの個性を伸ばし、心身ともに健やかに育てる教育が実践されることを期待してやみません。

最後に、この場をお借りして、本提言の作成に向けて、御理解と御協力を賜りました多くの県民・関係者の皆さまに、心より御礼を申し上げます。

平成18年8月

かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会

委員長 高木展郎



1 提言がめざす方向

私たちは、今回の県民論議を通じて、参加者の皆さまが最も必要と感じていることを次のテーマで表しました。

地域・家庭・学校
つむぐ おりなす かながわの人づくり
○育てる思いを重ね合う ○持ち味や役割が響き合う ○学び合う、学び続ける

これは、地域、家庭、学校が協働し、それぞれの特徴や役割をいかして、これからのかながわの人づくりを、共に考え、実行していこうという願いを込めたものです。

『つむぐ』とは、繊維を引き出して、よって糸にする。』『おりなす』とは、糸を織って、美しい模様を織り上げる。」という意味で、未来を担う子どもたち一人ひとりの、それぞれの個性やよさをいかしつつ、まわりの大人たちが様々にかかわり合いながら大切に育てていくさまを表すとともに、子どもたち自身や大人たちも、そこから互いに学び合い、さらに生涯を通じて学び続けることで成長を遂げていく大切さ、すばらしさを表現したものです。

これまでは、教育というと、その多くを学校が担ってきました。しかし、人の教育という営みは、本来、生涯にわたって様々な場面で行われるものであり、学校のみですべてを行うことはできません。また一方で、学校は、地域の中にあり、家庭とも直接的な関係をもっている存在です。

そこで、地域ができること、家庭ができること、学校ができること、それぞれの役割を明確にした上で、補完し合いながら協働し、子どもを育てていくことが重要となります。その際、それぞれの立場や役割の違いを自覚しつつも、子どもを育てるという共通の方向性、ビジョンをもつことが必要です。

人は一人では生きていけません。まわりの様々な人とかかわりながら、影響を受けたり、与えたりしながら成長していきます。次代を担う子どもたちに対しても、すべての人々がこのような自覚と責任をもち、かかわっていくことが大切です。そうした行動が、大人自身の学びにもつながり、今を生きていることを実感することになるのです。

このような思いを、地域、家庭、学校というつながりの中で、重ね合い、響き合い、学び合うことで、実現していきたいと考えています。

なお、サブテーマでは「合う」という表現を用いています。双方向性を有する、このような学びの力が発揮されるようになると、学校教育にも新たな学びが加わり、これまでの内容を再構成していくこととなります。人づくりを通じた、このような協働が進めば、学校だけで果たせなかった新たな教育の地平が広がっていくことになると確信しています。

2 提言の全体構成

提言がめざす方向

地域 ・ 家庭 ・ 学校

つむぐ おりなす かながわの人づくり

○育てる思いを重ね合う ○持ち味や役割が響き合う ○学び合う、学び続ける

1 地域に根ざした新たな教育コミュニティづくり

視点1 新たな教育コミュニティづくり

提言 1 地域の人々が相互にかかわれる場づくりを進める

提言 2 地域・家庭・学校をつなぐ人材を育成する

視点2 生涯を通じた自分づくりの応援

提言 3 多様な学習ニーズに対応できる場や機会をつくり、情報を提供する

提言 4 子どもの時から生きることや働くことの大切さを考え、実感できる環境づくり

提言 5 一人ひとりが健康・体力を増進させ、生活の質を高める

視点3 かながわの文化芸術・スポーツの振興

提言 6 かながわの文化芸術を継承・発展させ、生活に根付かせる

提言 7 生活の中で身近に運動やスポーツができる場や機会づくりを進める

2 みんなで子育て・家庭教育を支える社会づくり

視点4 子どもの心とからだを育てる家庭教育

提言 8 子どもの発達に応じた親や家庭教育のあり方を考える

提言 9 他者とかかわる楽しさや思いやる心を育てる体験を大切にする

提言 10 家族や家庭を大切にする心や態度を育成する

視点5 少子化時代の子育て・家庭教育への支援

提言 11 子育て・家庭教育を支えるコミュニティづくりを進める

提言 12 幼稚園や保育所、学校における子育て支援を充実する

提言 13 企業や社会が子育ての理解を深め、行動する

3 子どもが成長する場としての学校づくり

視点6 学ぶ楽しさやわかる喜びが実感できる学校教育

提言 14 心を育て、たくましく生きる力を育てる教育を推進する

提言 15 学ぶ大切さを理解し、意欲をもってのぞめる教育活動を進める

提言 16 基礎・基本をしっかり身に付ける授業づくりに取り組む

視点7 協働と信頼に根ざした学校運営

提言 17 学校の実態に即した創意工夫のある学校づくりを進める

提言 18 多様な教育的ニーズにこたえ、必要な支援を行える環境を整える

提言 19 学校を保護者や地域に開き、情報公開して協力を求める

提言 20 学校評価をいかした効果的な学校経営を行う

視点8 人づくりを担う教職員の確保と育成

提言 21 豊かな人間性と専門性を身に付けた教職員の養成や確保を図る

提言 22 授業研究をいかした新たな校内研修づくりを進める

提言 23 得意分野をもった個性豊かで高い実践的指導力のある教職員を育成する

提言 24 教師の活動実践や研修成果等をいかした人事等のシステムづくりを進める

3 提言〔3つの柱・8つの視点・24の提言〕

1 地域に根ざした新たな教育コミュニティづくり

子どもから大人まで、一人ひとりが生涯にわたって心豊かに自分づくりに取り組める、地域に根ざした新たな教育コミュニティづくりを進めていくことが課題になっています。

未来を拓く子どもたちは、すべての県民にとってかけがえのない「財産（人財）」です。かながわの子どもたちを、県民総ぐるみで一緒に汗を流し心して育てるとともに、大人自身も「教育・子育て」を縁としてつながり合うことが大切です。これからのかながわで、生きがいのある豊かな県民生活の創造に向け、自らの学びや社会参加・地域貢献などの活動にも意欲をもって取り組める、教育コミュニティを構築していくことを提言します。

視点1 新たな教育コミュニティづくり

地域は、子どもが大人として一人立ちするまで、人間形成上重要な機能を有しています。少子化時代を迎え、未来を拓く心豊かでたくましい人づくりは、地域や家庭、学校など社会全体で鋭意取り組んでいく必要があります。近年、経済社会の変化、人間関係や地縁的なつながりの希薄化により、共同生活が営まれてきた伝統的な地域社会は崩壊しました。また、遊び場の減少、地域の親近感・連帯感の薄れ、伝統文化の衰退などにより、地域の教育力が低下していることから、その回復が緊急の課題になっています。

そこで、本視点では、学校を地域の交流・学習拠点として、地域の人々が結集し、相互にかかわれる場として機能化し、家庭や企業などをつなぎ、様々な教育力を発揮させる人材育成を進め、地域の教育コミュニティづくりに取り組むことを求めます。

提言1 地域の人々が相互にかかわれる場づくりを進める (6頁)

提言2 地域・家庭・学校をつなぐ人材を育成する (6頁)

視点2 生涯を通じた自分づくりの応援

近年、県民の価値観やライフスタイルの多様化により、変化の激しい社会・経済への対応、心の豊かさや生きがいを得るための学習ニーズも多様なものになっています。こうした中で、県民一人ひとりが生涯にわたって学び続け、自己実現や社会参加など充実した人生を送ることのできる生涯学習社会の実現をめざしていく必要があります。

そのために、本視点では、多様な学習ニーズに対応できる場や機会づくり、若者の自立支援に向けて、生きることや働くことの意味を考えるなど人生にかかわる教育の推進、さらには健康・体力の増進に向けた活動の場や機会をいかして、子どもから大人まで日常生活の中で自ら意識して取り組めるよう、イベントやキャンペーン等での啓発を求めます。

提言3 多様な学習ニーズに対応できる場や機会をつくり、情報を提供する (7頁)

提言4 子どもの時から生きることや働くことの大切さを考え、実感できる環境づくり (7頁)

提言5 一人ひとりが健康・体力を増進させ、生活の質を高める (8頁)

視点3 かながわの文化芸術・スポーツの振興

かながわの豊かな自然と誇りある歴史と伝統の中で培われた文化芸術は、県民一人ひとりの生活にゆとりと潤いを与えるとともに、心の豊かさをもたらすものです。また、人間の身体的・精神的欲求にこたえ、生活をより充実したものとするためには、スポーツに親しみ、参加することが必要です。そのためには、活動を促進する場や機会づくりを一層進めることが大切です。

そこで、本視点では、県民の豊かな文化芸術活動やスポーツライフに向けて、より充実した文化芸術・スポーツの振興を求めます。

提言6 かながわの文化芸術を継承・発展させ、生活に根付かせる (9頁)

提言7 生活の中で身近に運動やスポーツができる場や機会づくりを進める (9頁)

視点1 新たな教育コミュニティづくり

提言1 地域の人々が相互にかかわれる場づくりを進める

【提言の説明】

かながわは、東京に次ぐ全国第2位（平成17年度）の人口を有する県であるため、日常的に人と人が接して豊かな人間関係を築く機会に恵まれている反面、コミュニケーション不足等によるすれちがいや意思の疎通を欠きやすい負の側面ももっています。

このような負の側面の弊害に陥らないためには、子どもが日常生活を送る中で、家族や友だち、学校の先生だけでなく、地域の多くの人々に接し、様々な影響を相互に与え合うことができる環境が必要です。

そこで、学校を地域の教育コミュニティづくりの拠点とし、地域のキーステーション、すなわち多くの地域の人々が相互にかかわれる場として機能させながら、同時に学校を核としたコミュニティの再生を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 社会教育施設等と学校との連携・協力によるまちづくりセミナーの実施
- 公民館等の社会教育事業と学校の授業等との相互乗り入れの促進
- NPO等の地域の組織を運営母体とした学校施設活用の促進 等

提言2 地域・家庭・学校をつなぐ人材を育成する

【提言の説明】

かながわには、全国にも誇れる、豊富で多彩な人的・物的・知的なリソース（資源）があります。それらの貴重な財産をかながわの教育に有効に活用していくことが重要です。

そこで、県内の各地域に、子どもたちを豊かに育てるための、新たな教育コミュニティをつくる必要があります。この教育コミュニティの機能をいかし、継続的で発展的な取組みを推進する上には、地域や家庭、学校をはじめ、企業やNPOなど、様々な教育力をつなぎ、豊かな学びをコーディネートする人材の育成が必要です。

そこで、教育コミュニティの核となる人材育成のプログラムを形成するとともに、地域の教育コミュニティ再生のキーパーソンとなるコーディネーターの育成を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 地域のリソース（資源）バンクの形成とその活用に向けた県民への広報の実施
- 地域教育コミュニティ再生の成功例の事例研究
- 地域協働コーディネーターの育成プログラムの開発とその運用 等

視点2 生涯を通じた自分づくりの応援

提言3 多様な学習ニーズに対応できる場や機会をつくり、情報を提供する

【提言の説明】

人々の生活様式や価値観の多様化が進み、これに伴って県民の学習ニーズも多様化しつつあります。余暇充実のために学習を望む人だけでなく、資格取得や就職のために学習したいと願う人、あるいは健康づくりや高度な知的好奇心を求めて学習しようとするなど多様な学習ニーズが見られます。これらに対応するためには、公民館をはじめとする社会教育施設や生涯学習関連施設を利用して、県民がいつでも、どこでも学べるような仕組みづくりが必要です。また、施設や行政が学習サークルを支援したり、様々な方法で学習情報の提供に努めたりすることも必要です。

そこで、県民が生涯にわたって学習を続けられるよう、既存の生涯学習関連施設の事業やサービスを見直し、学校開放事業の充実など学校との連携を図り、さらに学習相談・学習情報提供事業に取り組むなどして学習環境整備に一層の工夫を図ることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 生涯学習関連施設を個人や少人数でも利用できるような運営方法の改善
- 学習サークル支援の充実と市民の学習事業参画の推進
- インターネットなど ICT を活用した学習情報の提供や学習相談の充実 等

提言4 子どもの時から生きることや働くことの大切さを考え、実感できる環境づくり

【提言の説明】

かながわの若者が仕事を通して、自らを自律的に磨きながら、社会や地域・家庭において一定の役割と責任を果たすことが大切です。そのために、子どもから大人まで、正しい自己理解や職業理解に努め、生きることや働くことの意味を考え、将来の自分の生き方や人生設計等を行う意欲や能力などを身に付け、それらをいかしていく力を育てる教育(キャリア教育)が必要です。

そこで、地域・家庭・学校が協働して、子どもの発達に応じて各学校段階等で系統立てたキャリア教育を推進するとともに、企業等との協働により、若者をはじめ様々な世代が、県内の産業や職業に対する理解を深め、生きがいや誇りがもてるような取組みを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 子どもの発達に応じて系統立てたキャリア教育プログラムの開発
- 子どもから大人までを対象にしたキャリア・カウンセリングの充実
- 地域の企業・組織との協働によるインターンシップや職業教育指導の実施
- かながわの産業に対して理解を図り、誇りがもてる教育や取組みの推進 等

提言5 一人ひとりが健康・体力を増進させ、生活の質を高める

【提言の説明】

県民一人ひとりが充実した人生を追求していくためには、子どもの頃から心身の健康を保持・増進するとともに、ライフステージに応じた健康づくりが大切です。そのためには、食生活をはじめ望ましい生活習慣の定着を図るとともに、運動やスポーツに親しむことを通して、健康でたくましく生きるための体力を育む意欲や態度、実践的な能力などを身に付けていく必要があります。

そこで、子どもの成長・発達に応じた親子のふれあいや遊び、地域の人々との交流、また学校での組織的、計画的な学習、さらには社会全体で活力に満ちた「楽しみ」や「生きがい」を得られる健康・スポーツライフの実現に向けた、活動の場と機会の充実を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 地域・家庭・学校が一体となった食育の推進
- 総合的な健康・スポーツに関する活動をいかした自分づくりの推奨
- 親子がふれあうスポーツや、レクリエーションの実施
- 中高年齢層への健康・体力づくりの奨励 等

Column

チャレンジショップの教育効果！

神奈川県立小田原城東高校は、昭和26年4月に創立した伝統ある商業高校です。平成16年4月、「Gestore おだわら」というショップを開設し、授業で学んだ知識・技術をいかして、仕入れ、販売、会計処理などを実際に学んでいます。このチャレンジショップは、小田原市、小田原銀座商店会、小田原銀座自治会など地元の協力を得て、お互いに持っている教育力を出し合い、いかし合いながら、一緒に発展していこうという目的をもっています。まさに地域との協働による新しい取り組みです。ここでの体験を通して、働くことの喜びを生徒が感じ取り、自らの生き方・進路を選択する



大切な機会を得ています。本校生徒にとっては、学んだ知識や技術を実践的な体験を通して検証し、さらに様々な工夫を考えていくとても貴重な機会になっています。チャレンジショップでの生徒自身の変容から高い教育効果があると感じています。

【ワークショップ公募委員 廣幡 清広】

視点3 かながわの文化芸術・スポーツの振興

提言6 かながわの文化芸術を継承・発展させ、生活に根付かせる

【提言の説明】

県民一人ひとりが身近な文化芸術を理解し、尊重していく態度と心を育むことを通して、かながわの文化芸術の継承と創造に努めていくことが大切です。そのためには、子どもから大人までの一人ひとりが文化芸術に対する感性や豊かな情操を養い、自ら実践し、創造する喜びを体験したり、感動したりする身近な場や機会を拡充し、文化芸術を生活に根付かせることが課題になります。

そこで、社会教育施設をはじめとする関連施設において文化芸術に関する事業の充実を図り、学校においては地域社会や社会教育施設等との連携を図りながら児童・生徒に対し、文化芸術に関する体験的な学習の機会の提供と充実を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 社会教育施設をはじめとする関連施設における演劇、舞踏、音楽、美術などの文化芸術の実践的な活動を通じた生涯学習の促進
- 学校教育における文化芸術活動の推進・強化
- かながわ独自の文化芸術に関する学習教材の開発や人的な交流の促進 等

提言7 生活の中で身近に運動やスポーツができる場や機会づくりを進める

【提言の説明】

すべての県民が生涯にわたり、健康で活力ある生活を営んでいくためには、体力や能力・志向等に応じてスポーツに親しむことのできる「生涯スポーツ社会」をめざすことが大切になります。そのためには、県民が豊かなスポーツライフを送るための人材育成や場・機会づくりを拡充していくことが必要です。

そこで、個々のニーズに応じてスポーツを始めるきっかけづくりや、継続して運動やスポーツを行うことができる地域スポーツクラブの創出、コーディネーターの育成、さらには運動やスポーツ活動を支援するネットワークや相談支援システムの整備を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 地域におけるスポーツクラブの創出・育成
- 県民の運動やスポーツを支援する地域ネットワークづくりやガイドブックの作成
- 公民館等の社会教育施設におけるスポーツ関連事業の充実
- 学校の教師力を活用した地域での生涯スポーツを促進するコーディネーターの育成 等

2 みんなで子育て・家庭教育を支える社会づくり

わが国ではここ十数年、かながわを含めて、少子化の傾向が強まっており、子育てのあり様も従来とは変わってきています。多くの親が自らの成長過程の中で、わが子をもつまで子育てを身近に感じる機会がないまま、自らの子育てに向き合っています。また、子どもへの要求をすべてかなえようとする親が多くなる一方で、子どもにほとんど関心をもたない親が増えるといった、子育ての二極化が進んでいるとも言われています。こうした中で、子どもたちの心とからだの育ちをめぐって、様々な問題が指摘されるようになりました。

そこで、次代を担う子育ての大切さをすべての県民が認識し、現に子育て中にある家庭への支援体制づくりと、これから親になる世代に対しての「親準備性」を育てる環境づくりを提言します。

* 「親」……………血縁関係の親のみならず、広く子どもの養育を担う大人のこと。

* 「親準備性」…人が、親になることについての学習や経験のこと。少子化の進む現代では、成長の過程で、乳幼児とまったく接する機会がないまま大人になるというケースも珍しくありません。

視点4 子どもの心とからだを育てる家庭教育

家庭は子どもがはじめに会う人間社会です。そこでは、子どもの命を守り、人として健やかに育つよう、惜しみなく愛情と手をかけることが必要です。子どもの心とからだを育てる育児の基本はここにあります。今日の社会状況の中では、それが難しい課題になっています。

そこで、本視点では、これまでほとんど無意識のうちに行われてきた子育て文化を改めていかすとともに、これからの時代に対応した、新たな子育てのあり方について考え、築いていくことを求めます。

提言8 子どもの発達に応じた親や家庭教育のあり方を考える (12頁)

提言9 他者とかかわる楽しさや思いやる心を育てる体験を大切にする (12頁)

提言10 家族や家庭を大切にする心や態度を育成する (13頁)

視点5 少子化時代の子育て・家庭教育への支援

かながわの子どもたちの心とからだを豊かに育てるには、多くの人たちの支援が必要です。子どもたちの成長を見守っていくというかかわりの中で、地域の輪（和）を広げていくことが大切です。

そこで、本視点では、家庭と、幼稚園や保育所、学校が相互に協力・連携して子育てを進めることはもとより、企業や社会の様々な主体が、子育てへの理解と協力を促進することを求めます。

提言11 子育て・家庭教育を支えるコミュニティづくりを進める (14頁)

提言12 幼稚園や保育所、学校における子育て支援を充実する (14頁)

提言13 企業や社会が子育てへの理解を深め、行動する (15頁)



視点4 子どもの心とからだを育てる家庭教育

提言8 子どもの発達に応じた親や家庭教育のあり方を考える

【提言の説明】

ここ十数年、わが国では、ますます少子化傾向が強まっており、かながわでも例外ではありません。このような時代にあっては、わが子が生まれるまで、乳幼児の世話をしたり、遊んだりした経験のない親も珍しくなくなっています。赤ちゃんが泣いても「おなかが空いたのかな？オムツが汚れて気持ちが悪いのかな？あやしてほしいのかな？」と、にわかには想像できない親も少なくありません。このように、戸惑いながら子育てを始めざるを得ない状況を改善していく必要があります。

そこで、少しでもこの戸惑いを軽減し、余裕をもって子育てや家庭教育に取り組めるよう、多様な「親の学び」の機会の提供を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 産前の母親教室・乳幼児の健康診断等で子どもの心身の発達や年齢に応じた親のかかわりについても学べるプログラムの作成
- 日常の子育てを振り返ることのできる親子ふれあいイベントの継続的实施
- 子育て相談員の常駐する子育てインフォメーションセンターの開設 等

提言9 他者とかかわる楽しさや思いやる心を育てる体験を大切にする

【提言の説明】

人を信頼し、人とかかわる力を育てるためには、乳幼児期に親がしっかりと子どもの気持ちを受け止めることが基礎になると言われています。この基礎があつてこそ、のちに他者とかかわる楽しさや思いやりの心が育成されていくのです。しかしながら、最近では、子どもからのサインや気持ちを受け止める余裕のない親が増えており、子どもに「こころを受け止めてもらった」経験をいかにもってもらうかが課題となっています。

そこで、乳幼児期以降にも、地域・家庭・学校で子どもたちが、他者とかかわる楽しさや思いやりを感じる体験の機会づくりを仕掛け、課題解決に向けた取組みを進めることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 親向けに子どもの成長に応じて楽しく過ごすためのヒント集の配布
- 学校でのボランティア活動の活発化
- 高齢者・学生のプレイリーダーを置いた冒険遊び場の設置 等

提言 10 家族や家庭を大切にすることの心や態度を育成する

【提言の説明】

人は幼いときに親や家族に大切にされる経験を通して、家族や家庭を大切にすることの気持ちをもつようになります。ところが最近では、兄弟姉妹の数が減少し、「自分の思うことは何でも通る」と考える自我の肥大化した子どもと、反対に「自分を大切に思えない」という自己肯定感の弱い子どもが増えています。いずれもその養育環境から、年齢相応に育っていないことの証です。これは家庭の中だけで解決しにくい問題です。

そこで、子どもが生活するそれぞれの場において、家族と家庭を尊重する態度を育成するための行動を、発達段階に応じて起こすことを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 家庭での「たのしいお手伝い」を推進する運動の展開
- 小学校・中学校・高校の「家庭科」の授業を通して「家族について考える」授業の継続的実施
- 高校生による「保育体験」「介護体験」の機会の充実 等

Column

居場所って？ ～「いる ある」から「なる」へ

学校にも、地域にも「居場所」があり、そこに人と人とのつながりができることで、「まち」はつくられる。そのまちは、子どもにとっても大人にとっても学ぶ場である。そこでの活動を通して、子どもは「地域の子供」になり、学校を卒業しても地域の住民になり続けることになる。大人もしかりである。この連鎖こそがまさに「まちづくり」であり、そのまちを生き生きとした躍動的なものにしていく。

学校も地域もこの「仕組み」を考えることが大切であり、時に、その両者が一緒に考え、活動することで、その効果はさらに大きくなる。

「まち」づくりは「学びの場」づくりでもある。

【ワークショップ公募委員 中川 洋太】



視点5 少子化時代の子育て・家庭教育への支援

提言11 子育て・家庭教育を支えるコミュニティづくりを進める

【提言の説明】

子育ては、はじめはだれでも戸惑うものです。それを円滑に行うためには、いろいろな人の支援が必要です。子どもが成長していく中で、そうした支援を受けることを通じて、地域とのつながりが深まります。また、地域にある様々な人的、物的資源を活用することによって、支援の輪も広がります。さらに、地域のボランティア活動に参加している方々や、病院や保育機関のスタッフなどと交流することで、子育ての楽しさを共有し、子育ての悩みを共感することもできます。

そこで、地域の親子が交流する場や異年齢の子どもが共に活動できる機会を設けたり、幼児教育機関がセンターの機能を発揮して、地域での子育てや家庭教育を支えることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 地域子育てサポートクラブの開設
- 小児科の医師、保育士などの子育て専門家によるセミナーの開催
- 親子と一緒に集い体験（体操教室など）を共有できる機会の増大 等

提言12 幼稚園や保育所、学校における子育て支援を充実する

【提言の説明】

子どもは、乳児期・幼児期・児童期・青年期といくつもの発達段階を経て大人になっていきます。発達の過程には個人差もありますから、家庭と、幼稚園や保育所、学校が相互に協力・連携を深めて、一人ひとりの子どもが育つ過程を支えることが大切です。幼稚園や保育所から小学校、小学校から中学校への接続が、子どもにとってスムーズに進むような仕組みづくりが必要です。

そこで、保育・教育機関の連携による家庭環境の把握や虐待の早期発見への配慮、楽しい親子参加型行事の開催、地域の子育て経験者や専門家を子育てコーディネーターとする子育て相談室の設置など、幼稚園や保育所、学校における子育て支援の充実を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 家庭、保育・教育機関の交流を深め、連携して子どもの育ちを見取る仕組みの構築
- 小・中学校等の場をいかし、子育てコーディネーターを配置した相談室の開設 等

提言 13 企業や社会が子育ての理解を深め、行動する

【提言の説明】

家庭の教育力を高めるためには、親が子育てを楽しみ、思える社会を築かなければなりません。そのためには、社会全体で子育てのあり方を理解し、支援する輪をつくる必要があります。特に、企業や社会の理解と協力を促進することが重要な課題です。

そこで、かながわ子育て支援基金の創設や、小・中・高校生の職場体験を受け入れたりする企業に対する優遇措置や顕彰の実施など、社会全体が子育てへの理解を深め、行動するよう導く施策の展開を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 従業員の子育てを支援する運動の展開、運動を推進する企業の顕彰と広報
- かながわ子育て支援基金の創設
- 企業や社会に対して、子どもの職場体験の大切さについての啓発及び県の広報媒体での実績掲載 等

Column

飛行機の仕事を知ろう！ 日本航空の教育支援への取り組み



子どもは、人類社会にとっての「宝」です。未来を拓く子どもたちのために、企業が有する多様な資源や教育力を活用していくことは、これから企業がもつべき大切な視点ではないでしょうか？私が勤める会社でも、子どもたちの教育に向けた様々な取り組みを行っています。

✦ キャリア教育支援

JAL 本社ビルのある品川区で社会人を中学校に講師として派遣する「しながわ寺子屋」プロジェクトに参加し、運航乗務員、客室乗務員、整備士などの JAL グループ社員がそれぞれの職務内容について講演しました。この活動を通じて青少年がキャリアプランを考えたり、社会に目を向けるきっかけづくりをお手伝いできたらと思っています。

✦ 整備工場見学 (<http://www.jal.co.jp/kodomo/>)

羽田空港にある JAL の整備工場には毎年約 5 万人が見学に訪れますが、その 6 割が学校からの見学者です。また、出張航空教室も年間 35 回程度行っています。

【ワークショップ公募委員 中島 徳顕】

3 子どもが成長する場としての学校づくり

県民の多くが、学び合いと成長の場としての学校に期待しています。かながわの学校には、県民の期待にこたえきれていない部分がある一方、大切にすべきすばらしい学校文化の蓄積もあります。

学校が今持っている良さや強みを伸ばし、すべての教師が一体となって社会の変化に対応しながら子どもを育てていくために、教育活動や学校の運営方法、教職員研修のあり方を見直すことを提言します。

視点6 学ぶ楽しさやわかる喜びが実感できる学校教育

県民が学校に求めていることは、わかる授業と楽しい授業を通して、子どもたちが社会の構成員として自立し、賢く、心豊かな人間に育つように支援してくれることです。そのために学校は、子どもの心を育てる授業や、学ぶ大切さを理解できる授業、基礎・基本をしっかり身に付けることのできる授業を行う必要があります。

そこで、本視点では、学校がそうした期待にこたえるための授業づくりや、質の高い教育活動を行っていくことを求めます。

提言14 心を育て、たくましく生きる力を育てる教育を推進する (18頁)

提言15 学ぶ大切さを理解し、意欲をもつてのぞめる教育活動を進める (18頁)

提言16 基礎・基本をしっかり身に付ける授業づくりに取り組む (19頁)

視点7 協働と信頼に根ざした学校運営

学校が地域に十分開かれていない、学校運営に効率的でないところがあるとの指摘がありますが、様々な課題に取り組むためにも、これからの学校は地域社会との連携が一層重要になります。

そこで、本視点では、学校が校長のリーダーシップのもと、すべての教職員が一丸となり、地域に開かれ、地域の信頼を得て、地域とともに子どもを育てる運営を求めます。

提言17 学校の実態に即した創意工夫のある学校づくりを進める (20頁)

提言18 多様な教育的ニーズにこたえ、必要な支援を行える環境を整える (20頁)

提言19 学校を保護者や地域に開き、情報公開して協力を求める (21頁)

提言20 学校評価をいかした効果的な学校経営を行う (21頁)

視点8 人づくりを担う教職員の確保と育成

教師の資質・能力が直接問われる問題が指摘されていますが、多くの教師は使命感に基づき意欲的に教育活動に携わり、子どもたちの学びと成長を支援しながら今の学校を支えています。教師には、高い人間性と教えるための情熱や確かな力量が求められています。

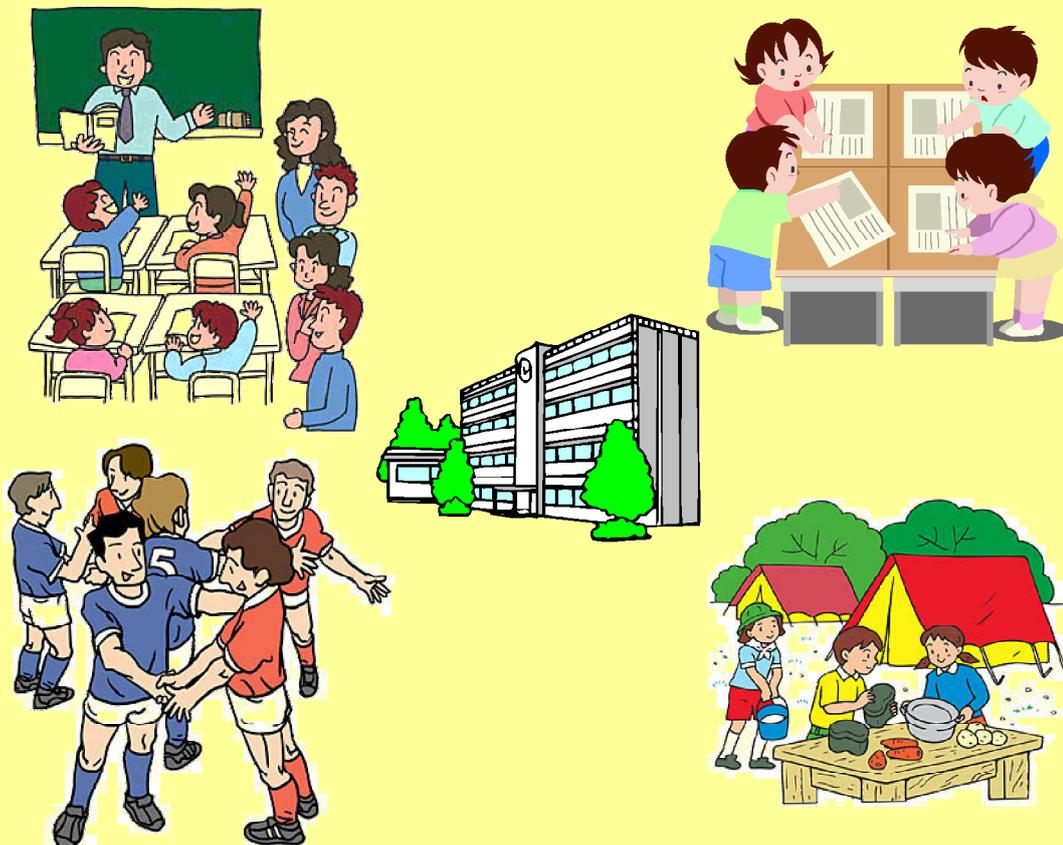
そこで、本視点では、かながわの教育を支えるのにふさわしい人材を確保し、指導力を向上させるシステムの構築を求めます。

提言 21 豊かな人間性と専門性を身に付けた教職員の養成や確保を図る (22 頁)

提言 22 授業研究をいかした新たな校内研修づくりを進める (22 頁)

提言 23 得意分野をもった個性豊かで高い実践的指導力のある教職員を育成する (23 頁)

提言 24 教師の活動実践や研修成果等をいかした人事等のシステムづくりを進める (23 頁)



視点6 学ぶ楽しさやわかる喜びが実感できる学校教育

提言14 心を育て、たくましく生きる力を育てる教育を推進する

【提言の説明】

学校は、子どもたちが集団で学び合い成長する場です。そこで子どもたちは友だちや先生とかかわり、意見をぶつけ合いながら、考えを深め学びを進めていきます。そして、その中で相手を思いやる心や互いに理解し合う心が育成され、道徳心や公共心も生まれてきます。しかし、現状では、そうした人とかかわりを上手く結ばずに悩んでいる子どもも多くなっています。こうした状況を改善するには、本音で語り合う授業、自己を振り返り、よりよい自分をめざす学習が必要です。

そこで、様々な学習活動や体験を通して、自己理解や自己表現ができること、友だちとかかわりながら活動することで他者理解をしたり、コミュニケーション能力を身に付けたりすることなど、子どもたちの心を育てる教育を推進していくことを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 集団での学び合いや体験を通じて、自らの行動や生き方につながる心の教育の促進
- キャリア教育の推進（個々の生きることや働くことにかかわる諸能力の育成）
- 奉仕や福祉等の社会体験や自然体験の機会の確保 等

提言15 学ぶ大切さを理解し、意欲をもつてのぞめる教育活動を進める

【提言の説明】

子どもたちの学びを高めるためには、学習への主体的かつ意欲的な取り組みが必要です。子どもたちが「楽しいな」という思いで、自ら学習に取り組んでいくことで学習が深まります。

また、自分の考えを表現したり、友だちと意見交換をしたりすることで、自身を高めていくことができます。このような問題解決型の学習活動は、教師が目標達成に向けて、個に応じながら子どもたちと向き合い、進めて行かなくてはならない活動です。

そこで、子どもたちが学ぶことの意義を考え、意欲的に学習にのぞみ、課題を解決すること、学んだことをいかして行動できる子どもの育成をめざした教育を求めます。さらに、そのための教師を支える環境づくりを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 子どもの学習意欲や主体的な学習態度を育てる授業づくりの工夫・改善
- 子どもの問題解決能力を育てる教材の開発
- 教師が授業研究を進め、深められる校内体制づくり 等

提言 16 基礎・基本をしっかり身に付ける授業づくりに取り組む

【提言の説明】

基礎・基本には、社会生活上の基礎・基本と学校教育における基礎・基本があります。学校教育における基礎・基本とは、学習指導要領の定める各教科の目標と内容が、その目安となります。学校では、子どもの成長に応じて、この基礎・基本をしっかり身に付けさせることが重要です。

また、学校教育において、中心となるのは授業です。教師にとっては、授業を通して子どもを成長させる場をいかに用意し、整えるかが大切であり、そのための高い専門性に裏付けられた、わかりやすい授業づくりと授業実践を求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 目標を明確にして行われる、わかりやすい授業の実施
- 教えるべきところでは教え、子どもに考えさせるべきところでは考えさせるというメリハリのきいた授業の実施
- 授業を振り返って評価し、それをいかした授業を行うような、指導と評価の一体化の実践
- わかりやすい授業づくりに向けた指導技術を高める研修プログラムの開発と実践 等

Column

小学校1年生のスムーズなスタートに向けて！

子どもたちにとって、幼稚園・保育所から小学校への入学の際には、期待とともに、大きな不安があると言われています。県の少人数学級研究指定は、平成17年度からスタートした画期的な制度で、1クラスの人数が平均35人から40人の場合に適用されます。これにより、個々の児童の対応をよりきめ細かくできたり、徹底して机間指導をしたり、ノート指導を行ったりして個々の学習状況を把握して、つまずきのある子どもの個別指導ができます。子ども



も同士も、顔や名前を早く覚え、コミュニケーションもとりやすく、教室のスペースが広々としていて、雰囲気もゆったりしています。保護者との連携もきめ細かくとりやすいです。

【ワークショップ公募委員 小川 義一】

小学校に入学した子どもたちが、学級という集団活動になじめなかったり、学校生活のルールが理解できなかったりすることから、授業中に席を立って歩き回ったり、騒いだりする現象による問題を、近年では「小1プロブレム」と呼んでいます。

視点7 協働と信頼に根ざした学校運営

提言17 学校の実態に即した創意工夫のある学校づくりを進める

【提言の説明】

これからの時代は、子どもの実態に即して、その学校ごとに身に付けさせたい学力を明確にすることが求められています。その実態は、地域や家庭の状況によって異なります。これまでのわが国の学校教育では、学習指導要領を基準として、学習内容を規定してきましたが、これからは、学習指導要領を基本としつつも、各学校の子どもの実態に即した学習内容を確立する必要があります。

そこで、それぞれの学校が独自のカリキュラム開発を行うとともに、そのカリキュラムを再構成、吟味して意味付けを行い、さらに新たなカリキュラムを創出するという、循環型のカリキュラム・マネジメントを用いた、創意工夫ある学校づくりを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 学校を一つにまとめるための管理職のリーダーシップ能力の向上
- 総括教諭などを中心に、組織の力を発揮できる学校体制の構築
- 教師同士のコミュニケーション能力の向上
- 学校が独自のカリキュラム編成を行うための、教育委員会や教育センターの支援の充実 等

提言18 多様な教育的ニーズにこたえ、必要な支援を行える環境を整える

【提言の説明】

障害のある子どもには各人のニーズに応じた教育の場が用意され、そこで特別な教育が展開されています。すべての子どもたちは、それぞれ様々な教育的ニーズを持っています。ニーズに応じた教育的支援が受けられることが大切です。そのためには、一人ひとりの様々な教育的ニーズを的確に把握し、学校を中心とした総合的な支援体制を構築していく必要があります。

そこで、多様な教育的ニーズに対応するために、学校のもっている機能を十分に発揮すると同時に、各学校間の連携、地域の様々な専門機関や専門家と連携・協働することや、学校が地域における教育のセンター的機能を果たすことを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 特別支援教育を基本にした学校運営の推進
- 交流教育と共同学習を推進するカリキュラムの検討
- 多様なニーズに対応した専門家の配置
- 特別支援学校の適切な施設設備の充実とセンター的機能の発揮
- ニーズに対応した学校・学級の選択の拡大 等

提言 19 学校を保護者や地域に開き、情報公開して協力を求める

【提言の説明】

かながわで育つすべての子どもたちが、教職員や地域の人々に見守られ、安全が確保された時間と空間の中で、質の高い温かな教育を受けることが望まれます。教育を学校という場に限定することなく、人とのコミュニケーションの積み重ねや、地域への理解や愛着をもてる豊かな人間性を大切に育てる姿勢が、子どもの将来にわたる成長を支える力となります。

そこで、保護者や地域の人々の協力する登下校の安全確保や、あいさつのやりとり、地域行事への参加等を通じて、地域住民としての自覚を促し、様々な人の輪の中で子どもを育てることを大切にしたいと考えます。地域と学校とが、適切な相互理解を深め、具体的な地域協力を進めることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 子どもの活動を支える幅広い年齢層のボランティア登録制度の充実
- 町内会や自治会を通じた地域住民への学校の教育方針や重点課題への理解と協力
- 地域資源や優れた人材をいかした体験学習、総合的な学習の展開
- 登下校を見守る地域拠点づくり(商店、コンビニエンス・ストア、在宅家庭)
- 顔の見える関係の構築(生徒が行う学校行事参加呼びかけ・チラシ配布等)
- 学校を支援したいと思う地域の人や企業からの支援を受け入れる制度の創設等

提言 20 学校評価をいかした効果的な学校経営を行う

【提言の説明】

学校が保護者や地域からの信頼を得て、日々の教育活動を通じて次代を担う県民を育成するためには、学校に対する正しい評価システムを構築することにより、保護者や地域関係者が学校への関心やかかわりを一層深め、自ら可能な協力・支援を行う機会を広げるなど、協働による学校づくりを進める必要があります。

そこで、学校評価が「自己評価」「第三者による外部評価」及び「設置者等の支援方策」のセットで行われる体制を整備するとともに、学校評価が単に教育活動の実施状況の点検のみに帰するのではなく、学校の教育活動の変容を促す視点で実施されることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 学校改善に資する「評価と支援」が一体化した学校評価システムの開発
- 自律的学校経営を支える、かながわらしい学校評議員制度の再構築
- 第三者による学校外部評価実践モデル校の設置
- 外部評価者養成研修システムの確立
- 学校評価システムを根幹に据えた地域運営学校の設置 等

視点8 人づくりを担う教職員の確保と育成

提言 21 豊かな人間性と専門性を身に付けた教職員の養成や確保を図る

【提言の説明】

教職員には、豊かな人間性と高度の専門性をもつことが求められます。そのためには、養成段階から採用、採用後の研修まで一貫した教職員の力量向上の考え方に基づく支援体制を確立することが必要です。例えば、教職に関心のある学生に在学中から学校とかかわりをもつ機会を与えることで、教職への志望を高めるとともに、充実した養成教育を受けることができるようにし、現職の教職員が生涯をかけて指導力を向上する仕組みを整えることが求められます。

そこで、上記のようなシステムを構築するなどの取組みを通じて、現職から未来の教職員まで、着実な養成や確保が図られることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 教職をめざす大学生や大学院生が、子どもや経験豊かな教職員と交流できる場の設定
- 採用から現職教育までの一貫したシステムの構築
- 教育分野以外の講話を聞くなど、人間性と社会性を高める研修の工夫
- コミュニケーション能力、表現力を磨く研修の実施
- 長期にわたり、教職員の変革を促すための問題解決型の研修機会の設定
- 子ども理解やわかる授業など、具体的で効果的な「教える技術」を教授し、伝え合えるような研修機会の充実 等

提言 22 授業研究をいかした新たな校内研修づくりを進める

【提言の説明】

多くの教師は、教育センターなどで研修することはもちろん、校内でも有用な研修をしています。このように校外研修と校内研修は、教師にとって共に重要な研修の機会です。特に校内研修の中心的な方法である授業研究は、諸外国が注目する優れた研修方法です。多くの学校がテーマを定めて研究に取り組み、その中で教師は授業を公開し合い、授業づくりや指導法について研修を深めています。校内での教師の学び合いが、多くの教師の力量をさらに伸ばしていきます。

そこで、日常の授業に即した校内研修、特に授業研究に力を入れて研修することの意義を、改めて認識し、それを盛んにしていく体制を整えることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 各学校での授業研究を中心とした校内研修の充実
- 校内研修の成果に応じた行政による指定研修等のカリキュラムの柔軟化
- 講師派遣など、校内研修の支援体制の整備
- 校内研修をコーディネートする教師の育成
- 校内研修の活性化に向けた学校間での研究交流の促進 等

提言 23 得意分野をもった個性豊かで高い実践的指導力のある教職員を育成する

【提言の説明】

かながわには、幼稚園から高校まで約7万人の教職員がいます。それぞれの特性をいかした研修や活動を通じて、個々の潜在的な能力を引き出すことが、それぞれの学校等の教育力を高めることにつながります。具体的には、それが学校組織運営に対する能力であったり、教科指導等で他の教職員をリードする能力であったりします。このようにして、学校の人的資源を有効に活用していくことが求められます。

そこで、それぞれの教職員が得意とするところを積極的に評価し、個々の特性に応じた研修の機会を確保することを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 専門分野・得意分野を伸ばす教職員研修の充実
- 専門分野・得意分野に秀でたリーダー教職員の育成と、勤務校を超えて活躍できるシステムの構築
- 得意分野に秀でた教職員の表彰
- 勤務校を離れて研修を深め、教育活動等に資する教職員の研鑽機会の確保 等

提言 24 教師の活動実践や研修成果等をいかした人事等のシステムづくりを進める

【提言の説明】

多くの教師が、よりよい授業づくりや教育活動の実践に向けて、絶えまない努力や研鑽を重ねるなど、子どもたちのために一生懸命取り組んでいます。そのような教師の努力や成果が、もっと評価される必要があります。また、教師の自主的な努力を促進し、高い力量をもった人材を増やすためにも、教師の自主的な職能成長や校内研修への取組みを評価し、個々の課題に即した研修や人事を行うことが必要です。

そこで、個々のニーズを満たす研修で教育力を高めるとともに、そうした教師の実践的な取組みが適正に評価されるような、柔軟な人事等にかかわるシステムづくりを進めることを求めます。

〔課題解決に向けた具体的な方策例〕

- 子どもの理解を深める研修等の充実
- 教師が他者の目で評価され、努力が報われる適正なシステムの構築
- 校内研修で育成された優秀な教師が、県内全体の学校レベルを引き上げ、学校力を向上するための効果的な人事異動のシステムの構築
- 教師が自らの意欲や関心で研修を受講しやすくなるような、教育センター等の受講手続きや研修方法の工夫
- 教師が学校での教育課題の解決に向けて、自主的に受講した民間等での研修が、公的な研修活動として認証されるような制度やシステムの導入
- 効果のある優れた授業のネット配信や、e-ラーニングのコンテンツ拡充による、教師の自主研修機会の充実 等

あとがき

そもそも「人づくり」とはどういうことなのでしょう。家や道具などのモノづくりとはどうも意味が違うようです。モノづくりは、材料に加工を施し、これを組み立てるなどして、予定された形に仕立てることを言うのですが、人づくりはそうではありません。人は生まれてから地域・家庭・学校などで生活し、すでに「在る」存在ですから、これをモノづくりのように「つくる」ことはできないのです。ただ、変化の激しいこれからの時代や社会を生きていくためには、絶えず自らを磨き、バージョンアップしていくことは必要になります。これは自分づくりと言ってよいでしょう。この自分づくりを支援することこそが「人づくり」なのです。そこで、県民の皆さまの自分づくりをどのような視点と方法で支援することができるのかを示したのが、この「かながわの教育ビジョンに関する提言」です。

これまで、教育というと学校を中心にして考える傾向がありましたが、人は様々な場で自分づくりに努めている実態を考えれば、当然、家庭や地域の役割も注目されなければなりません。そこで、これからのかながわにおいては、地域・家庭・学校が力を合わせて協働して、子どもから高齢者まであらゆる世代が教育や学習を通して自分づくりを進めることができる環境整備が大切な課題になります。そのためには、身近な地域に学び合いのコミュニティを創り、これらのネットワーク化を進めながら、かながわらしい教育システムづくりが期待されるわけです。

本提言を契機に、かながわの教育ビジョンづくりに向けて、さらなる県民論議が活発に展開され、よりよい教育をめざしたチャレンジとアクションにつながれば幸いです。

かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会

副委員長 佐藤晴雄

資料編

- | | |
|---|----|
| (1) 教育ビジョンに関する県民論議の経過…… | 26 |
| (2) 「かながわ人づくりフォーラム・ワーク
ショップ」での主な意見一覧…… | 28 |
| (3) 用語解説…… | 33 |
| (4) かながわ人づくりフォーラム運営推進
委員会の設置及び運営に関する要綱…… | 37 |
| (5) かながわ人づくりフォーラム運営推進
委員会名簿…… | 38 |

(1) 教育ビジョンに関するする県民論議の経過

①ワークショップA：テーマ「少子化時代に対応した家庭教育を支える子育て環境づくり」						
回	日時	場 所	参加者数	参観者数	人数合計	議論の主な内容
1	2/11(土) 10:00- 11:30	自治総合 研究セン ター	19名	6名	25名	「子育て環境の良くなっている点、悪くなっている点」をテーマにグループごとに課題の洗い出し
2	3/19(日) 13:30- 15:00	自治総合 研究セン ター	17名	0名	17名	前回の課題の洗い出しで、「子育て環境の悪くなった点」を改善するために、良くなった視点から改善方法を見出す協議
3	4/22(土) 11:10- 12:40	総合教育 センター	24名	8名	32名	前回までの議論を踏まえ、幼児期、小学校期、中学校・高校期の3つの時期区分におけるキーポイントと、発達段階ごとの子育ての姿と家庭や地域等の子育てへのコミットの仕方等についてグループで協議
4	5/27(土) 13:00- 15:00	体育セン ター	24名	11名	35名	「乳幼児期の子育てや家庭教育を支援する環境づくりを考える」をテーマにグループで協議
5	6/3(土) 9:30- 12:50	総合教育 センター	18名	4名	22名	「小学生の健やかな育ちを支える親や身近な人達との関わり方について」をテーマにロールプレイングで体験的なワークショップを展開。次に体験をいかし、「小学校期における子育て・家庭教育を支援する環境づくりを考える」をテーマにグループで協議
6	7/1(土) 13:30- 15:30	波止場会 館	24名	6名	30名	「中学校・高校期における子育て・家庭教育の課題について」をテーマにグループで協議。その後、全体で協議してきた成果の取りまとめ

②ワークショップB：テーマ「学ぶ楽しさやわかる喜びが実感できる学校づくり」						
回	日時	場 所	参加者数	参観者数	人数合計	議論の主な内容
1	2/11(土) 10:00- 11:30	自治総合 研究セン ター	36名	12名	48名	「なんで勉強するの？」をテーマにグループごとに課題を洗い出し、グループで協議。今後の進め方についても議論
2	3/19(日) 13:30- 15:00	自治総合 研究セン ター	34名	0名	34名	前回の主な議論の集約として「よりよく生きるために勉強する」という回答を踏まえ、今回は「神奈川の学校はきちんと子どもを育てることが出来ていると思いますか？」をテーマにグループで協議
3	5/3(水) 13:30- 15:30	近代美術 館・葉山 館	33名	8名	41名	前回のグループ協議で洗い出された課題を基に、「子どもの意欲を喚起する教育はどうあるべきか」「神奈川の自由な教育をどうとらえるべきか」「学校は保護者や地域の人とどう対応すべきか（学校運営のあり方を含める）」「教師の姿勢・力量を上げるためにはどうすればよいのか」の4つのテーマでグループに分かれて協議
4	6/3(土) 11:00- 12:50	総合教育 センター	44名	8名	52名	これまで3回の議論の内容を収斂した資料で、再度全体で協議。新たに付加すべき論点の提案をも検討
5	7/1(土) 13:30- 15:30	波止場会 館	36名	16名	52名	学校教育の内容、学校運営、教職員の確保と育成の3つの論点で整理した内容を全体で協議。その後、ワークショップを振り返りながら、成果の取りまとめを確認

③ワークショップC：テーマ「生涯を通じた自分づくりを応援する環境づくり」						
回	日時	場 所	参加者数	参観者数	人数合計	議論の主な内容
1	2/11(土) 10:00- 11:30	自治総合 研究セン ター	23名	10名	33名	「生涯にわたっての自分づくり」「若者の自立支援」「コミュニティづくり」の3つのテーマについて、グループに分かれて意見の表明と課題の洗い出しに向けた協議
2	3/19(日) 9:30- 11:30	自治総合 研究セン ター	19名	10名	29名	前回の課題の洗い出しを受けて、「個人が担うもの」「行政が担うもの」「協働で担うもの」に分類し、さらに「すぐに着手できるもの」「中長期的に取り組むもの」に振り分ける検討・協議
3	4/22(土) 11:10- 12:40	総合教育 センター	24名	9名	33名	前回の議論をさらに深めるため、整理した内容について「効果の大きいもの」と「効果が小さいもの」に分類し、グループで協議し、全体に報告
4	6/3(土) 11:00- 12:30	総合教育 センター	17名	8名	25名	これまで3回の議論の内容を収斂した資料で、再度全体で協議。新たに付加すべき論点を検討し、明瞭なフレーズを付して整理
5	7/1(土) 13:30- 15:30	波止場会 館	15名	7名	22名	「場や施設の活用(企業のかかわり)」「キャリア教育」「安全・安心のまちづくり」「教育資源(リソース)の活用」「コミュニティづくり(地域・連携)」の視点で整理した内容を全体で協議。その後、ワークショップを振り返りながら、成果の取りまとめを確認

【合同ワークショップの開催状況】

A・B合同ワークショップ：テーマ「小1プロブレム」を考える！」						
回	日時	場 所	参加者数	参観者数	人数合計	議論の主な内容
1	3/19(日) 15:05- 16:50	自治総合 研究セン ター	51名	0名	51名	ワークショップBの主催で、小学校1年生をめぐる課題について、幼稚園・小学校・医療の立場にある3名のパネリストによる基調提案等で共有化を図り、課題解決の方途に関して参加者を含む全体で協議

A・C合同ワークショップ：テーマ「家庭の教育力の再生と新たな地域づくりを考える！」						
回	日時	場 所	参加者数	参観者数	人数合計	議論の主な内容
1	4/22(土) 9:35- 11:00	総合教育 センター	71名	0名	71名	ワークショップAの主催で、家庭や地域の教育力の低下が問われる状況を捉え、家庭と地域での教育力の再生に向けた具体的な取組について基調提案があり、それを踏まえ、子育てや教育に悩む親や孤立化する家庭への支援のあり方と地域で子どもを育てる環境づくりの2つの課題を設定して全体で協議

B・C合同ワークショップ：テーマ「子どもの学びと生き方・進路との一体化に向けたキャリア教育を考える！」						
回	日時	場 所	参加者数	参観者数	人数合計	議論の主な内容
1	6/3(土) 9:35- 11:00	総合教育 センター	74名	0名	74名	コーディネーターによる基調提案と小学校と高校の教員、それに大学生という立場からの実践報告を受けて、参加者全体でキャリア教育についての議論を展開。最後にコーディネーターから議論のまとめ

(2) 「かながわ人づくりフォーラム・ワークショップ」での主な意見一覧

項目	ワークショップ全体を通じて出た意見	課題内容
教育ビジョンにかかわる意見	① 「かながわ人づくり宣言」に述べられている「基本理念」から「基本方針」まで、及びそれぞれの「課題」については十分吟味され、立派なものであると思うが、この内容ではどこの都道府県でも通用するものであり、「神奈川らしさ」「ダイナミックさ」に若干欠けているように思う。	○ 神奈川らしいダイナミックさの視点が必要
	② 県教育委員会が教育行政に権限と責任をもつ立場として、一人の人間が、人として生まれ、育ち、生き、老いる、それぞれの時期を主体的で豊かな人間性に満ちたものとして過ごすための、大きな支えとなる明確な考えや姿勢をこの教育ビジョンで示してほしいと、心から期待している。	○ 学校や地域の垣根を越えた「顔の見える手作り感覚の子育て環境」をつくっていく工夫が必要
	③ 「基本理念」「めざすべき人間力像」「基本方針」は、それぞれ理想的な理念、方針であり、異存がない。「検討の方向性」にある「新たな教育コミュニティを核とする家庭や地域社会と連携した教育」に関しては、多様な育児の選択があってよいと思う。学校や地域の垣根を越えた「顔の見える手作り感覚の子育て環境」をつくっていく工夫がほしいと思う。	○ 教職員の質的な面の向上が必要であるという視点
	④ 大人も子どもから学べる暮らしづくりが必要ではないか。「子どもが楽しい、面白い」教育の場をつくることで、子どもから大人に、大人から子どもに、自然な笑顔や知識、経験、感覚が相互に交流し広がり合うことが望ましいと思う。	○ 子どものコミュニケーション能力を育てるという視点
	⑤ どれも今の教育の状況に合った、非常に良いものであると思う。ただ、「教職員の資質・能力と組織力の向上」の中の「組織力」については、高さだけでなく質にも着目してほしいと考える。「検討の方向性」にある「時代や社会の変化に対応できる豊かな知性を身に付ける教育」については、教師が生徒に対して偏りのない情報を与えるということを、その前提として強調したい。	
	⑥ 子どもたちのコミュニケーションが度々問題になっている。兄弟が少ない、親は忙しい、親戚や近所とのつながりが希薄という環境の中で、生きる力はどこで養うのか。個々の課題に応じて色々な場面や機会の設定の必要を感じる。「検討の方向性」には、「食に根ざした快いコミュニケーション・環境整備」・「保健室と相談室の隣接設置」・「優秀な教職員の明確な基準と活用」を加えるようお願いしたい。	
	⑦ 「自分さえ良ければという風潮が強くなってきているので、ぜひ「基本理念」「めざすべき人間力像」「基本方針」には、自分を大切にしつつ、他者を思いやり、社会のために貢献する人間をつくることを重視してほしい。	

項目	ワークショップ全体を通じて出た意見	課題内容
教育ビジョンにかかわる意見	⑧ 真に子どものためを考え、「自分で考え」、「善悪を判断し」、「行動する」、その下地づくりができる教育をめざしてほしい。	○ 「人間力」に関する共通理解を図り、具体的にどのような力を子どもに付けたいかを明確にする必要 ○ 生命の尊さを基本に据える視点が必要 ○ 学んだ力よりも学ぶ力の育成に重点をおく視点 ○ 市町村を含む県全体で教育ビジョンをつくっていく視点
	⑨ 教育ビジョンについて考えると、「命の尊さ(大切さ)」が基本であると思う。生きる楽しさ、喜びはその次に生まれてくるものと考えている。	
	⑩ 「人間力」という中心となる概念について、十分な共通理解が図られていないと感じる。どんな力を身に付け、どんな学習が必要か、アイデアを出し合い、「子どもたちにこのような力を付けたいために、こんな学習をめざそう」ということを確認していく必要がある。	
	⑪ 「人間力」という言葉が、児童・生徒にはわかりにくいので、人間としてよりよく生きようとする力を「人間力」として定義してはどうか。「自立した一人の人間」という言葉もわかりにくいので、「社会とのかかわりの中で、自己を成長させ、社会に貢献する力」を中心に据えればよいのでは。また、「自己を尊重し、肯定する」ことが先にあって、「他者を尊重し、多様性を認め合う、共感・共生できる思いやる力」を身に付けさせたいと考える。	
	⑫ 「教師力」が課題であり、進路指導一つ取り上げても教師の現状認識は覚束ない。保護者や地域と一体化したキャリア教育のカリキュラム化が望まれるし、また教師自身が見聞・見識を深めるとともに、自主研修によって学校を取り巻く環境の変化や現状を認識する必要がある。	
	⑬ 「検討の方向性」にある「一人ひとりの個性伸長に向けた多様な教育ニーズへの対応」のとおり、学力については、世間で言われているように、「学んだ力」よりも「学ぶ力」をきちんと児童・生徒に伝えていく必要がある。また、学び合う際のコミュニケーションスキル(学び合いのやりとりをする力)の向上が大切である。	
	⑭ 「基本理念」に関して、少しわかりにくくなっているので、「人間力あふれる かながわの人づくり ～未来を拓き、心豊かに生きるために～」という表現はどうでしょうか。	
	⑮ 教育ビジョンづくりに関して、広く開かれた形で県民も加わって議論が出来ていることは喜ばしいことである。ただ、小・中学校は市町村の教育委員会の所管のため、今回のビジョンづくりにどれだけ関与しているか危惧している。	
⑯ 教育ビジョンに関しては、「人間の生命の尊重」への配慮を第一義にすべきである。		

項目	ワークショップAを中心に出た意見	課題内容
子育てや家庭教育にかか る意見	① 子どもが外で、体を使って遊ぶ体験型の経験が減少している。一方では、子どもが安全・安心に遊ぶ環境も脅かされており、それらを回復して、発達に応じた遊びや友達など人とのかかわり方などを学ぶことが大切である。	○ 家庭の子育て・教育の役割と自覚、そして支援のあり方が課題
	② 子育てしやすい環境になった一方で、地域の連携、近所の方々のつながりが薄れ、孤立する親が増えている傾向にあり、子育てや家庭教育を総合的に支援する仕組みづくりやコミュニティづくりが必要である。	○ 少子化時代に対応した子育てを支える環境づくりが必要
	③ 親が子どもとふれあい、コミュニケーションをとる機会の希薄化など、親子のかかわり、つながりが低下する中で、発達段階に応じた親の子どもへのかかわり方などを伝えていくことが大事である。	○ 安全・安心に子どもが活動できる居場所づくりが必要
	④ 愛情やしつけ、公共のマナー、基本的な生活習慣など家庭での子育て、教育の役割が軽視され、意識が低下しているといえる。	○ 孤立する親の相談・支援の充実が必要
	⑤ 発達に問題がある子どもの保育、学校環境が整備されていないと思う。	
	⑥ 心おきなく子どもの相談をできる場が探しにくくなっていると感じるので、学校に第三者による親の相談窓口を開設するなどの取組みが必要と考える。	

項目	ワークショップBを中心に出た意見	課題内容
学校づくりや教師にかか る意見	① 総合的な学習の時間などをいかして、生きる力の育成を重視した教育の実践が必要である。	○ 子どもの学習意欲の低下の課題
	② 子どもの学ぶ意欲が低下している。学ぶ楽しさやわかる喜びが子ども一人ひとりに感じられるよう、学ぶ過程を重視した授業を通じて、学び方を学ぶ教育に力を入れていくことが大事。	○ 自主性を伸ばす学校教育が必要
	③ 子どもの自主性を伸ばし、選択と責任のあり方を学ばせることがかながわの教育として課題と思う。放任ではない、自主性を伸ばす教育に期待する。	○ 子どもが明確な価値観がもてる教育が必要
	④ 心の教育や人間性の教育に力を入れる必要がある。いじめはよくないという明確な価値観をもつ子どもを育てるため、はっきりとしたメッセージの伝わる道徳教育を行うべきである。	○ 子どもとのコミュニケーション能力の向上を図る教育が必要
	⑤ 子どもたちが自分の考えや思いを伝え合うや表現する力など、コミュニケーション能力が低下していることから、この能力を伸ばす教育に力を入れる必要がある。	○ 落ちこぼしを出さない努力が必要
	⑥ 子どもが色々な他者とかかわること、自然とふれることなど、多くの体験が必要である。	○ 学校理解を図る情報提供が必要
	⑦ 義務教育段階で落ちこぼれを絶対に出さないことを目標として設定し、保護者と子どもの安心と信頼を与えること。	
	⑧ 学校の情報を発信することで、保護者、地域に対して十分に説明責任を果たす。	

項目	ワークショップBを中心に出た意見	課題内容
学校づくりや教師にかか る意見	⑨ 学校と保護者・地域の人々の信頼関係が十分でない。情報を公開すると同時に協力を求めていくことが必要である。	○ 子どもが学んでいることを実感できるような評価の工夫などが必要 ○ 教師が直接子どもとかかわる時間の確保に向けた学校システムの改善 ○ 教師の自覚と責任、使命感に関する課題 ○ 教師の専門性を高める教員研修が必要 ○ 教職に魅力を感じる優秀な教員の確保に向けた課題
	⑩ 子どもの意欲を引き出す評価のあり方など、子どもに学んでいることを実感させること（通知票や学力テスト以外にも）が必要。	
	⑪ 教師が子どもと直接かかわる時間を増やすように、学校のシステムを変えていくことが求められる。	
	⑫ 教師が学校や学校外でも孤立し、チームで対応していないなど連携の希薄な点が気がかりである。	
	⑬ 教師としての自覚と責任、使命感に対する意識に対する問題。	
	⑭ 学習意欲を引き出し、個性を伸ばしたり、課題解決できるような能力を身に付ける点で、子どもに確かな指導や支援ができる教育の育成が重要ではないか。	
	⑮ 教師の多忙さを考え、学校内での研修を充実させ、校内での教え合いを活性化するような仕組みづくりが必要である。	
	⑯ 教師の個々の専門性を高め、課題解決する研修が極めて重要である。	
⑰ 教師の努力を適切に評価できるようなシステムを構築し、人事評価、新しい職階制、免許更新制などを定着させ、やる気のある教師集団にする。		
⑱ 教職に魅力が感じられるような教師の育成と学校教育の展開と、優秀な教師を確保する。		

項目	ワークショップCを中心に出た意見	課題内容
自分づくりにかか る意見	① 地域の教育力の低下や団塊世代の高齢化などの中で、自分づくりに向けた場づくり、機会づくりに関して課題を感じる。	○ 自分づくりの場や機会の課題 ○ 地域で人や社会などつなぐ人の育成が必要 ○ 発達段階に応じたキャリア教育プログラムの開発が必要 ○ 生涯学習や生涯スポーツに向けた意欲や知識を育てることが必要
	② 地域での活動に対する住民の参加意識が低下する中で、様々な人々がかかわり、地域や学校などつなぐコミュニティづくりが必要である。	
	③ 自分づくりを支援してくれる人や、情報提供が不十分と思う。	
	④ 地域での住民等の交流が希薄になる中で、地域の安全に対する不安も増加しているため、安全・安心なまちづくりの視点が大事ではないか。	
	⑤ 一生を通じて自分を探し、自分づくりをしていく意欲や知識が育っていない。	
	⑥ 働くこと、社会とかかわることなど、生きていく力が若い世代に育っていないことから、早い段階からキャリア教育に取り組んでいく必要がある。	
	⑦ 学校でのキャリア教育を充実させるため、発達段階に応じたキャリアプログラムの開発が必要である。	
	⑧ 異世代間の理解や交流が促進できるような仕組みや手立てが必要。	

項目	ワークショップ全体を通じて出た意見	課題内容
その他参加体験を通じての意見	① 「小1プロブレムを考える！」の合同ワークショップに参加して、小児医療の立場からの話に共感できた。学校や保護者の見方が異なり、子どもの立場にたった見方ができていないと感じた。	○ 異校種間の接続における教育の課題
	② 幼稚園から小学校に限らず、異校種の学校間の接続に問題が生じているので、少人数での指導など、この部分への対応が最優先であると感じた。	○ 地域での子どもの居場所づくりが必要
	③ 「家庭の教育力の再生と新たな地域づくりを考える！」というテーマの合同ワークショップを通じて、中・高生の居場所づくりはぜひ地域で行うべきであると思った。声かけが大切であり、地域の安全にもつながってくる。	○ 子育てに悩む親や孤立する親を生まない手立ての工夫
	④ 「家庭の教育力の再生と新たな地域づくりを考える！」の合同ワークショップで考えたことは、孤立する親や子育てに悩む親がでないように、地域の学校が拠点となって、講演会や体験学習の場や機会を設定し、仲間づくりを助けることが大切であると感じた。	○ 学校教育での早い段階からのキャリア教育への取組
	⑤ 「子どもの学びと生き方・進路との一体化に向けたキャリア教育を考える！」の合同ワークショップに参加して、キャリア教育について理解することができた。大事な教育であるとわかった。	○ ワークショップに参加しての自分への気づきと他者理解が体験できたこと
	⑥ キャリア教育の実践報告などを聞いて、学校教育は人格形成のすべてを網羅している完成度の高さを改めて痛感できた。	○ 県民との協働・参画によってかながわの教育を推進することが必要
	⑦ ロールプレイングを体験して、明日からの自分の生活、地域が身近で豊かなものになったと思う。	
	⑧ ワークショップに参加して、様々な世代の人と意見交流ができたこと、そして色々な考え方にめぐり会えたことが何よりもよかったと思った。	
	⑨ 高校生の視点、教師の視点、企業で活躍されている方の視点、高齢の方の視点など、ワークショップではこれからのかながわの教育について考えるという共通テーマで、色々な立場の方から意見や考えが聞けてとてもよかった。	

項目	電子会議室での議論より	議論内容
子どもの教育をめぐる環境	① これまで私たちは、家庭や地域社会で担うことを、学校に任せてきたということはないだろうか？子どものことは何でも「学校」に「先生」にと、先生に求めすぎていたのではないだろうか？もっと、地域や家庭でできること、しなければいけないことがあるはずです。	○ 学校の役割についての議論
	② 学校側と保護者をはじめとする世間の方々の求めている教師像とは多少異なるのではないかと思うが、多様化していく社会のニーズにこたえられるような柔軟性を持ち、教育に対する強い信念を抱き続けられるような人こそが理想の教師像ではないかと思う。	○ 理想の教職員像についての議論
	③ 現在の子どもたちは、コミュニケーション能力が不足しているように思います。親と子で語り合うようなコミュニケーションの場が減り、人のやさしさなど豊かな心が育ちにくいケースが多いのではないだろうか？そこで、親以外の様々な方々とふれあうことにより、コミュニケーションの機会を多くできるように、開かれた学校づくりを進めることが大事なのではないかと感じた。	○ 開かれた学校づくりについての議論

(3) 用語解説

	用語	解説	提言番号
ア行	生きる力	<p>国では、「生きる力」を、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力をあわせて発揮するものととらえている。</p> <p>かながわ人づくりフォーラムでは、その考え方に沿っているが、特に豊かな人間性に注目した。</p>	14
	インターンシップ	<p>児童・生徒が在学中に、企業などの産業の現場などにおいて、自らの学習内容や将来の進路などに関連した就業体験を行うこと。</p> <p>最近は、高校や大学だけでなく、小学校や中学校でも行われるようになった。</p>	4
	ICT (Information Communication Technology)	<p>情報通信技術の略称で、情報コミュニケーション技術とも呼ばれている。一般的に、情報技術全般を IT と呼ぶことが多いが、海外では教育分野においては IT に代わり、ICT という用語を使うことが主になってきている。</p>	3
カ行	外部評価	<p>現在、学校では国が定めた小学校設置基準、中学校設置基準等により、毎年、自己評価を実施し、その結果の公表に努めることとされている。外部評価とは、学校の自己評価結果を、学校評議員、保護者、地域住民等の外部評価者が評価する方法を基本として行うものである。外部評価者の対象から学校関係者を除き、評価の信頼性や客観性を高める工夫も一部で試みられている。</p>	20
	学習指導要領	<p>国として、一定の教育を保つため、教育課程を編成する上での最低基準を示した文書のこと。教科書は、この学習指導要領に従って編修され、各学校の教育課程も、学習指導要領を基準として編成することとなっている。</p>	16、17
	学校評議員制度	<p>教育委員会の判断で、学校や地域の実情に応じて置くことができる。学校評議員は、校長の求めに応じて学校運営に関して意見を述べることになる。</p>	20

	用 語	解 説	提言番号
カ行	かながわ子育て支援基金	<p>子育て家庭の様々な不安や負担の解消に向けた取組みを、企業が経済的に支援することを目的とした基金制度の仮称である。</p> <p>この基金からの支援によって、親子のふれあい体験活動や、地域や NPO などの子育て支援活動が、より一層充実されることが期待できる。</p>	13
	基礎・基本	<p>基礎・基本とは、一般に単純な読み書き計算能力をイメージするが、国では、思考力、判断力、表現力、課題発見能力、問題解決能力、学び方、学ぶ意欲などのすべてにわたり、基礎・基本が据えられていると考えている。</p> <p>かながわ人づくりフォーラムでは、この考え方を踏まえ、特に知識・技能の面の基礎・基本の指導を重視する必要性を考えた。</p>	16
	キャリア教育	<p>国では、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」（文部科学省資料）ととらえている。</p> <p>具体的には、子どもの発達に応じて、早い段階から、地域・家庭・学校などが協働して、体験的な活動などをとり入れながら、生きることや働くことなど人生にかかわる教育に取り組むことなどが想定される。</p>	4、14
	キャリア・カウンセリング	<p>子ども一人ひとりの生き方・進路にかかわる不安や悩み、疑問などについて、より適切に考え行動がとれるよう、個別に指導・支援したり、集団活動などを取り入れ、グループ別に指導・支援したりする活動をいう。</p>	4
	教育コミュニティ	<p>学習・教育を縁とした、新たな人とのつながりを形成しようとする地域づくりの新しい考え方。学校や幼稚園・保育所などに地域教育の核としての期待が寄せられている。</p>	1、2
	現代版井戸端会議	<p>同じ年代の子どもをもつ親同士が、協働で作業を行いながら、子どもの成長や子育てについての考えなどを語り合えるような機会の仮称である。</p> <p>会議室などにおいて親だけで行う場合もあるが、子どもたちの活動を見守りながら語り合うことで、自分の子育てを自然な形で相対化できるという効果が得られる。</p>	12

	用 語	解 説	提言番号
カ行	子育てインフォメーションセンター	<p>現在、子育てを支援する様々な事業が展開されているが、その情報が一元化されておらず、必要としている親たちまで、届きにくくなっている状況がうかがえる。</p> <p>そうした、課題を解決するために、官民を問わず、すべての子育て情報が入手、活用できるような情報拠点の仮称である。</p>	8
	子育てコーディネーター	<p>子育て支援情報の一元化の必要性とともに、そうした情報の内容を把握し、課題を抱えている親に対して、適切な情報の提供や助言など行う人材（スタッフ）の仮称である。</p> <p>子育てコーディネーターは、現在、徐々に増加の傾向にあるが、身近な小学校や中学校にこうしたスタッフがいることで、仕事を持ち、情報収集ができずに困っている親たちが、比較的気軽に利用できるようになる。</p>	12
サ行	自己肯定感	<p>自分自身をありのままに受け入れ、自分の存在を大切に感じたり、自信をもつことなどを自己肯定感という。</p> <p>また、これは、他者とのかかわりや、様々な成功体験からはぐくまれるものである。</p> <p>この過程が損なわれると、他者を大切に思う心も育ちにくく、親になったのちも、子どもをしっかりと愛することができにくいと言われる。</p>	10
	授業研究	<p>よりよい授業のあり方について、研究した成果を実際の授業を通して検証することをいう。授業研究では、一人の教師が授業を行い、その授業を同じ学校の教師や他校の教師が参観して、授業後に全員で検討することで研究を進める。このような研究の仕方はわが国独自のもので、教師の力量を高める効果も高いことから、アメリカを始め、多くの国が教職員研修の方法として取り入れつつある。</p>	15、22
	総括教諭	<p>神奈川県教育委員会では、平成18年4月より、学校でのグループリーダーとして教職員の新たな職として設置したもの。職務は次の3点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 校長・教頭の学校運営の補佐 ② 所掌グループの校務統括 ③ 教職員の人材育成 	17

	用 語	解 説	提言番号
タ行	地域子育てサポートクラブ	<p>子育てと仕事の両立に悩む親たちに対して学生や高齢者などのボランティアを中心とする、地域の人的、物的資源を活用した子育て支援組織についての仮称である。</p> <p>単なる子どもの一時預かりというよりは、子どもの遊びや体験活動、家庭学習の支援などを行う。</p>	11
	特別支援学校	<p>平成 18 年 6 月に「学校教育法等の一部を改訂する法律」が国会で承認され、同 19 年 4 月より盲・ろう・養護学校から転換し、従来の障害種別の枠にとらわれない柔軟な教育的支援を地域で行うことのできる学校の呼称。この特別支援学校は、地域の小中学校等への支援をこれまで以上に重視した地域における特別支援教育のセンター的機能としての役割を担うことになる。</p>	18
	特別支援教育	<p>国において、平成 13 年の春から使用している、旧来の特殊教育に代わる、障害児教育の新しい呼称。また、これまでの特殊教育では対象とされてこなかった学習障害(LD)や注意欠陥多動性障害(ADHD)、高機能自閉症、アスペルガー症候群の子どもたちも対象としている。</p>	18
ハ行	プレイリーダー	<p>プレイリーダーとは、子どもの視線に近い立場で遊び場にかかわる大人のことであり、イギリスでは「プレイワーカー」、ドイツでは「ペタゴ」などと呼ばれている。</p> <p>プレイリーダーは、冒険遊び場に欠かせぬ存在であり、子どもの興味や関心を高める場の整備から、子どもの遊びや相談の相手までつとめる存在である。</p> <p>また、遊びから見える子どもの姿を地域に向けて発信するなど、子どもの成長を見守る地域づくりに向けても活動を行う。</p>	9
	冒険遊び場	<p>冒険遊び場とは、子どもが遊びを創る遊び場のことであり、子どもが自分の責任で自由に遊ぶことを大切にしたい遊び場づくりから生まれてきた言葉である。プレイパークと呼ばれることもある。</p> <p>こうした考えは、1943年にデンマークに「廃材遊び場」が誕生して以来、イギリス、ドイツなどヨーロッパ各地に広がり、わが国には1970年代のはじめに紹介された。</p>	9
ラ行	ライフステージ	<p>人間の一生を発達段階ごとにわけた、幼年期・児童期・青年期・壮年期・老年期など、それぞれの段階のこと。</p>	5

(4) かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会の設置及び運営に関する要綱

(目的)

第1条 神奈川県における教育課題の解決に向けた取組の方向性について、県民との幅広い論議を通じて協討を行い、次代を担う人づくりの視点を柱とした神奈川の教育ビジョンづくりに向けた提言を行うことを目的として、かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、20人以内の委員をもって組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから神奈川県教育委員会教育長（以下「教育長」という。）が委嘱する。

- (1) 学識経験者
- (2) 学校教育関係者
- (3) その他教育長が必要と認めた者

3 委員会の設置期限及び委員の任期は、平成19年3月31日までとする。ただし、委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第3条 委員会には、委員長と副委員長を置く。

2 委員長は互選により選任し、副委員長は、委員の中から委員長が指名する。

3 委員長は、委員会を代表し、会務を総括する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときにはその職務を代理する。

(会議の運営)

第4条 委員会の会議は、委員長が招集し、その座長となる。

2 委員会で議決を行う場合は、委員の過半数の出席を得、出席した委員の過半数により決する。なお、可否同数のときには、委員長の決するところによる。

(意見の聴取)

第5条 委員長は、必要があるときに、委員会に委員以外の者の出席を求め、その意見を聴取することができる。

(協議事項)

第6条 委員会は、次に掲げる事項について協議する。

- (1) 神奈川県における教育課題の解決に向けた取組の方向性に関すること
- (2) 課題別ワークショップの開催に関すること
- (3) かながわ人づくりフォーラムで行う提言の内容に関すること
- (4) その他教育ビジョンづくりに関すること

(事務局)

第7条 委員会の事務を処理するため、事務局を神奈川県教育委員会教育局教育政策課に置く。

(その他)

第8条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

1 この要綱は、平成17年12月6日から施行する。

2 この要綱の施行後における最初の委員会は、第4条の規定にかかわらず教育長が招集する。

附 則

1 この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

(5) かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会名簿

(五十音順 ◎ー委員長 ○ー副委員長)

氏 名	職 名
荒木 汰久治	アウトリガーカヌークラブ湘南葉山主宰者
伊藤 昭彦	県立横浜清陵総合高等学校教頭
入江 礼子	共立女子大学家政学部教授
太田 てる子	主婦
金子 佳代子	横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程教授
佐藤 晴雄 ○	日本大学文理学部教育学科教授
佐藤 弘道	第一保育短期大学講師
鈴木 美喜	平塚市教育研究所指導主事
陶山 寧子	横浜市立大学附属病院小児精神神経科医師
高木 展郎 ◎	横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践総合センター教授
田代 正樹	株式会社たしろ薬品社長
千々布 敏弥	国立教育政策研究所研究企画部総括研究官
鶴岡 貴美子	逗子市立久木中学校教育相談員
當島 茂登	国立特殊教育総合研究所教育支援研究部総括研究員
林 義亮	神奈川新聞社編集委員及び論説委員
宮城 まり子	立正大学心理学部教授
横内 謙介	劇団扉座主宰者

かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会の開催記録

回	日時	会場	会議の主な内容
1	平成17年12月6日(火) 14:30-16:20	神奈川県自治会館 305号室	1 運営推進委員会の設置並びに委員長及び副委員長の選任 2 11月5日の「かながわ人づくりフォーラム」の実施経過報告 3 課題別ワークショップの開催について
2	平成18年1月23日(月) 9:30-11:30	神奈川県自治会館 701号室	ワークショップCのテーマ・進行等の協議
	平成18年1月24日(火) 14:30-16:30	神奈川県自治会館 702号室 703号室	ワークショップAのテーマ・進行等の協議 ワークショップBのテーマ・進行等の協議
3	平成18年6月3日(火) 13:30-16:30	神奈川県立総合教育センター 会議室	1 これからの運営推進委員会の取組について 2 「かながわの教育ビジョンに関する提言(仮称)」の作成に向けての協議
4	平成18年7月14日(金) 10:00-12:00	神奈川県庁本庁 605会議室	1 ワorkshop成果の確認 2 「かながわの教育ビジョンに関する提言(仮称)」の作成に向けての協議
5	平成18年8月2日(水) 14:30-16:30	神奈川県自治会館 306号室	1 第2回かながわ人づくりフォーラムの実施概要について 2 「かながわの教育ビジョンに関する提言(仮称)」の作成に向けての協議

かながわの教育ビジョンに関する提言

発行 平成18年8月26日

発行者 かながわ人づくりフォーラム運営推進委員会

連絡先 (事務局) 神奈川県教育委員会教育局
教育政策課企画班

電話 045-210-8081 (直通)

FAX 045-210-8921

電子メール kh-forum@pref.kanagawa.jp



古紙配合率100%再生紙を使用しています